

# 山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、  
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。  
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1

1 集中治療科のデスクでコンピュータ管理されたカルテや検査結果をチェックする羽田医師。デスクの向こう側が病床で、患者さんの様子が把握しやすくなっている。



2

2 集中治療室だけにベッドサイドにはたくさんの医療機器が並ぶ。必要に応じて数値をチェックし、患者さんの治療方針に反映させ、看護師に指示を出す。



3

3 看護師さんをはじめとするスタッフとは常に患者さんに関する情報を共有しておかなければならないため、全体でのミーティングや個別の打ち合わせも多い。

## 中学時代に決意した医者という目標を実現。 臨床で生命の尊さを胸に刻み、いずれは法医学の道へ。

信念の成果

羽田俊裕 医師

中学時代に法医学の先生の本を読み、将来は法医学の道に進もうと決意した羽田さん。その後も決意は少しもブレることなく、法医学に携わるためには医者になるしかないとい医学部を目指して懸命に勉強に励んだ。地元福島県をはじめ全国に数ある医学部の中からどの大学にしようかと考えた時、高校時代に部活動で訪れた山形の雰囲気がとてもよかったことを思い出し、一度住んでみたいと山形大学に決めたのだという。大学時代のいちばんの思い出は、障害児教育サークルでの活動。2年次以降も小白川キャンパスを拠点として障害をもった子どもたちとふれあい、子どもたちの社会性を育むお手伝いにあたった。その時の経験が医者となった今、さまざまなカタチでプラスになっていると感じている。サークルには

学内のあらゆる学部の学生が所属しており、学部の垣根を越えた仲間との交流も総合大学ならではの経験でとても楽しかったと当時を振り返る。

医学部卒業後、すぐにでも法医学の道に進みたかった羽田さんだが、尊敬する法医学の先生からは、「臨床も経験しておいた方がいい。しかも救急がいい。」とのアドバイスを受けていた。そこで、現在の職場でもある米沢市立病院で過ごした研修医時代からその言葉を意識して、研修期間の最後の半年間はずっと集中治療科(ICU)に配属してもらい、正式に勤務医となるときも同科を希望した。「今後、法医学をやっていくためには、生きるか死ぬかの究極の現場を見ておいた方がいいということだったので。治療を通してさまざまな症例を

見ておくことで、生前の姿を想像できる力が培われているような気がします。」とアドバイスの真意を理解し、法医学分野に進む際の糧にしようとしかり今の仕事と向き合っている。もちろん、救急の患者さんの診察や治療にあたることで元気になったと喜んでもらえる現在の仕事にも十分にやりがいを感じてはいるのだが、やはり「初志貫徹」の意志は硬いようだ。

「高校生の頃は泣きながら勉強していたな。」と辛かった思い出を懐かしみながら話す羽田さん。淡々とした語り口ながら強い意志を持つことの大切さ、目標があればがんばれる、後輩のみなさんにそんなメッセージを送ってくれているようだった。